



いにしへの映画つれづれ ② 映画パンフレット漂流記(3)

千葉豹一郎

日比谷映画の裏手にあった東宝ファンタジー・コーナーには、噂を聞きつけてか、パンフレット（以下 パンプ）を売りに来る人が次第に増えていった。そうした人が来ると、例によって番頭格のOは少し離れたゲームセンターのピンポンゲーム台の上に置いたパンフを手早く確認しながら、値段交渉をするのが常だった。すぐに決まる場合もあれば長くかかるときもあり、長い場合は交渉決裂となることが多かった。金を出す際はわれわれに見えないように背中を向けるので、どれ位の額かは判らなかったが、売り値からすれば大方の見当はついた。

ある土曜日の午後、大きな手提げ袋を重そうに抱えたオッサンがパンフを売りに来た。

上部まで詰め込まれたパンフの一部が見え、かなりの量だ。売り手は大体手提げ袋に入れてきたが、ここまで大量なのは珍しかった。交渉の様子を眺めていると、かなりのレア物らしいパンフがちらちら見えた。しばらく話し合っていたが、交渉は不成功に終わりオッサンが戻ってきた。それなら自分に売ってもらえないか、と前を通りかかったときに呼び止めた。Oはこうした交渉が不成立に終わった売り手とわれわれが接触するのを嫌い、客同士が売買の話しでもすると「ここでは止めて！」と強く制止した。しかし、このときはちょうど客が来て対応していたので気づかれなかった。オッサンは「まだ一杯あるよ」と付いてくるようにうながした。足早に歩

き出し、付いてゆくと日劇前のニュー・トーキョーの裏手の青空駐車場まで行き、白いライトバンの後ろで止まった。オッサンが後ろのハッチを開けると、持ってきたのと同じくらいのパンフが入った袋が二つほど鎮座していた。許しを得て手にしたパンフは値打ち物ばかり。ところが、オッサンはそれらのパンフの映画を観たときの話しなどばかりして、一向に売り値の話しにいかない。それどころか、何だかんだともったいをつけて埒があかず、本当に売る気があるのかも怪しくなってきた。Oに安値をつけられ、今度は小僧が相手では大した額は見込めず、急速に売る気を失くしたのかもしれない。連絡先を聞いて一度連絡はしてみたものの、相



戦前のアイドル、ディアナ・ダービンの大ヒット作「オーケストラの少女」の冊子。



「邂逅」(39)の冊子。監督のレオ・マッケリーが表紙のケーリー・グラント主演で「めぐり逢い」(57)にカラーでリメイクした。おもしろい「めぐり逢わせ」だ。

映画パンフレット漂流記(3)

変わらないのりくらりでさじを投げたが、どれ位の売り値を考えていたのかは興味深いところだ。

それから間もなく、二つ折りにした小さな封筒を持った老人が現れ、Oと交渉を始めた。老人が取り出したのはパンフというより冊子のようなもので、相当な年季物に見えた。かなりのコレクターAや他の客もいたが、あまり興味がなかったらしくすぐに積んであるパンフをまた漁り始めた。Oは首をかきげたりしきりに顎に手をやったりして、どうも思わしくない。案の定、Oは早々に戻ってきて、ああいうのはうちじゃちょっとね、と言った。老人は少しがっかりした様子で広げた冊子を封筒に戻し、あきらめられないという感じでコーナーに飾られたパンフを見回していた。見せていただけませんか？と声をかけると、しまったばかりの冊子を半分ほど取り出した。話しに聞く戦前に映画館

で無料で配布していたもののように、現物を見るのは初めてだった。表の日比谷映画の館名入りの単色カラーの冊子がたくさんあるではないか！「オーケストラの少女」(37)やゲーリー・クーパーやケーリー・グラントら当時の人気スターの主演作、深夜劇場で観た「歩く死骸」(36)などがあり、興奮を抑えきれなくなった。思わず、僕に売ってもらえませんか！と言った。老人は、いいですよと言って、ちょっと考え500円でいいという。500円なら安いものだ。しかし、買うとは言ったものの、あいにく先ほど目当ての中古パンフを買って残金は200円ほどしかなかった。まさか、こっちを買いたいから返品してくれ、とはとても言えない。そこで正直に、今日は持ち合わせがないので後日そちらの都合のいい場所に出向くと言うと、老人は代金は後でいい、と冊子を袋ごと手渡した。やや困惑する自分に、あんたを信用すると

の大正期のものから武蔵野館などの有名劇場に混じって、聞いたこともない映画館のものがいくつもあった。トーキーの初期には俳優や監督に氏や嬢を付けたものもあって、何とも品がいい。中古パンフの中には観た日時や、中にはO△嬢と、など連れの名前が書いてあることもあった。書き込みは中古パンフの価値を著しく下げるとされていたが、どんな人だったのだろうかと思像をめぐらすのはむしろ楽しみだった。思えば、売り手と直に会ったのは初めてで、その人が件の映画を観たときに思いをはせるとまた別の感慨があった。老人はニットのネクタイに興味のいいジャケットを着て、若い時分からかなりの洒落者だったことがうかがえた。いつも、めかしこんで映画館を回っていたのだろう。ただ、着ているものがややくたびれた感じで、白いワイシャツの襟がかなり汚れていたのが気になった。青春の大切な記念の品を安値で手放すくらいだから、現在はあまり暮らし向きもよくないのだろう。足元を見て買い叩いたわけではなく、言い値で買っただけなのだが、何か申し訳ない気がした。かといって、今さら買い値以上を提示するのは年配の人のプライドを傷つける失礼な行為であり憚り見たくて、大急ぎで帰宅した。中身を詳しく読むのは後回しにして、とりあえず一冊ずつめくった。サイレント時代

翌週、学校帰りに待ち合わせ場所の渋谷八チ公前へ行くと、老人はすでに来ていた。待ちぼうけにならなかったことに安堵したのか、ほっとしたような笑顔を浮かべ、お茶でも飲もうと言った。映画ファンの大先輩の

言って、こちらの連絡先も聞かずKと名乗って落ち合う日時を決めて帰っていった。受け取った冊子を一刻も早くじっくり見たくて、大急ぎで帰宅した。中身を詳しく読むのは後回しにして、とりあえず一冊ずつめくった。サイレント時代



「フランケンシュタイン」(31)で有名な怪奇俳優ボリス・カーロフの「歩く死骸」(36)。大変おもしろい映画で、近年ようやくソフト化された。



巨匠ウィリアム・ワイラーの「この三人」(36)。こちらも、1961年にワイラーがオードリー・ヘプバーン主演で「噂の二人」にリメイクした。

映画パンフレット漂流記(3)

話を聞けるのはありがたく、喜んで誘いを受けた。行きつけの店があるらしく、迷わず道路を渡る老人に付いていった。タバコ屋の前を通ったとき、あれ、いいかな？と唐突に振り返った。あっ、はい。店に行ったら渡そうと思っていた代金のことだとすぐに察した。いつも、午後になると金がなくなっちゃうんでね、とタバコの封を切りながらばつが悪そうに言った。家に居場所がなく、日がな一日外で時間をつぶしているのだろう。路地裏の喫茶店に落ち着くと、老人はこちらの質問に答えながらいろいろな話をしてくれた。老人は有名なK監督の作品に音楽を付けたことがあったそうで、音楽関係の人らしかった。ただ、詳しくは語らず、僕のことは誰にも言わないでくれと口止めた。話中に夢中になっているうちに夕方になり、店を出た。せめて自分の分は払おうと思っていたが、強く固辞された。タバコを買って、2人分のお茶代を出したらいくらも残らず、さらに申し訳ない気持ちになったが、冊子は大事にしますといたら笑顔を浮かべた。住所だけは教えてくれ、世田谷の住宅地だった。だが、家人との関係が悪いらしく、連絡はされたくないようだった。駅まで一緒に行き、またどこかで会

おうと言ってくれた。こちらも再会を願ったが、その後会うことはなかった。今も時折老人のことを思い出すことがあり、温厚な笑顔と境遇を思うと懐かしくもほろ苦い想いが湧いてくる……。

映画館回りとファンタジー・コーナー通いは相変わらず続き、親しくなったIとは互いのパンフのやり取りや情報交換などをよくした。Iは山の雑誌のモデルの仕事もしているとかで、映画やパンフの収集ばかりに固執しているのではなかったようだ。Iは他の常連たちともパンフのやり取りをしていて、例の盗難事件の被害者のAはすごく渋いとか、犯人と目されるEははったりが多いとかイメージが悪かったようだ。盗難事件は極端な例だったが、常連たちは熱が入り過ぎたこともあって、不協和音がさらに目立つようになっていた。いないメンバーの悪口を聞くことも多くなり、明らかに雰囲気が悪くなった。Oもだんだん店主気取りになり、店主のおばさんに対してもぞんざいな口調になって時折感度も悪くなった。話しを盛ってデカイことをいうのは承知していたが、高校の先輩Mからよからめ話が出てきた。Oより前から店に入出入りしていたMはおばさんにも

信用があり、時々店を手伝ったりしていたらしかった。最近ではOが休みの日に本格的に代わりを務めるようになっていた。中古パンフの知識に乏しいおばさんが頼んだようだった。ある日、店に行くときMだけがいて、パンフをいつもより安く売ってくれた。見慣れないふりの客にも同じような値段で売り、客が帰るとOは高く売ってその分をネコババしているのだと言った。どんぶり勘定で売り買いし領収書の類も出さないのだから、やりたい放題だろう。おまけに、可愛い女性客が来ると、品物を安くしてナンパもしているというのだ。たしかに、そうした現場を見たこともありかなり露骨だった。だが、不成功に終わり、他もほぼ全滅だったようだ。一番傑作だったのは、MがOとエレベーターに乗った際、Oが自ら辞めたと述べていたコロンビア映画の同僚も偶然乗り合わせ、クビになってからどうしているのかと思っていたと言われ、顔を真っ赤にせずと下を向いていたという話だった。Oは自分がコロンビアを辞めることが伝わると、あちこちから引きが来て断るのが大変だったと皆に吹聴していた。中古のパンフを売ろうと考

えついたのも自分だと言っていたが、実際はMだという。はたして、Oは間もなく店からいなくなった。ネコババを大目に見ていたおばさんも、さすがに図に乗り過ぎたOに堪忍袋の緒が切れてクビにしたらしい。しかし、目利きの出来ないおばさんに中古パンフの切り盛りは荷が重く、高校生のMもOのような常勤は無理だった。次第に中古パンフを売りに来る人も減って、また元の新古品を主に扱うようになった。そして、Mが3年生に進級して受験で忙しくなり、あまり店に出なくなった。常連たちも姿を消し、かつてよりうらぶれた感じになって自分も次第に足が遠のいていった。随分長い間のことのような気がするが、わずか1年足らずの間の出来事だった。いろいろ



戦前から喧伝されていた立体映画。その後も、流行っては廃れたりを繰り返していて案外進歩がない(笑)。

ろなことがあり、以降では考えられない価格で多数の目当てのプログラムも入手出来て一挙に世界も広がった。それから、ついで折に立ち寄ることもあったファンタジー・コーナーも、いつの間にか店を閉じた……。

その後中古パンフを扱う古書店は徐々に増え、ふらっと入った店でも時折見かけるようになった。やがて、映画雑誌に中古パンフを専門に扱う業者の広告も出始めた。「パート・ビー・リビングストーン」という業者とも個人ともつかない広告もあり、一度連絡してみたことがあった。パンフの編集や制作なども手がけているようだったが、目当ては中古パンフの方だった。通常の単純な売買ではなく1:3というような交換方式で、その仲介を担うらしかった。Yという代表者は、自分がさんざん考えて編み出した方法で、社名の由来となった人物から学んだのだという。そのリビングストーンなる人物は終戦直後に洋画の配給を牛耳っていた進駐軍傘下のCMPEの所属だったらしく、戦後の洋画界にとって大変な功績があったという。口ぶりから、リビングストーンに対する敬愛の念がひしひしと伝わってきた。

とりあえず、料金の切手と引き換えに案内を送ってもらうことにした。郵送されたコピーには手書きで多数の映画名がびっちり書き込まれ、豊富な知識に裏打ちされていることが読み取れた。だが、方式は結構複雑で交換比率にもどうも納得がいかずそのままになった。

80年代に入ると中古パンフを扱う業者も古書店もさらに増えて、バブルと歩調を合わせるように価格も急騰しブームといえる状況になった。中古パン

フとはおよそ無縁と思える古書店でも置くようになり、数万から十万単位のものなどともない法外な高値も散見された。仕入れる物が不足しているという話もよく聞き、皆が欲しがるので勢い落札価格も高くなっていったようだ。ロクな知識もない業者も多く、値付けを見れば映画やパンフに詳しいか疎いのかはすぐに判別がついた。疎い店に限って大したこともないパンフにとんでもない値を吹っかけ、そのくせ値打ち物の価値が判らずに安値を付けたりしていた。そうした間隙をぬって、希少品を安く買ったことも少なくなかったが、法外な高値の方に引っ張られて相場全体が底上げされるのはゆゆしきことだった。しかし、バブル崩壊と軌を一にしてブームも去っていった。儲けを見込んで大量に仕入れたパンフがダブついた店は、在庫を大量放出し結構な値打ち物を百円均一で出したりしていた。しかし、一度値上がった相場はそう簡単には元には戻らず、それなりの物はかなりの高値で推移している。新古品を扱う店は渋谷の松濤にあり、渋谷警察署の前に移転後もたまに行ったが、あるときエ

レベーターを降りたらシャッターが閉まっていた閉店したらしかた。21世紀になって間もなくの頃である。近年はネットの発達に伴って、目当ての物を比較的簡単に入手でき、値段も千差万別だ。業者ではなく個人では特にそうだ。一方、少ないながら専門に扱う店もあるが、やはり高い。このように中古パンフをめぐる状況は随分変わったが、一番変わったのはパンフ自体だ。印刷が鮮明になった一方、洋画では著作権の問題にくわえ、本国からの締め付けが厳しくなって指示された以外のことを書くことは許されず、かつてのようにこぼれ話のような記事は望むべくもない。邦画では書籍のような厚さのものも珍しくなく、値段も書籍並みでパンフの域を越えている。入場料より高い場合も少なくない。これでは主客転倒だ。今後、プログラムを蒐集する方には、やはり自分の目で現物を見て、相場などを肌で感じ取ることをお勧めする。以上で述べてきたように、思わぬ出会いや貴重な品が手に入るかもしれない。一生の財産になるような経験も得られることもあるだろう。何より、パンフの価値より、自分の好きな作品を優先することが肝要ではないかと思う。そうした過程を楽しみながら新たな世界に踏み出していただければ、同じ映画やパンフを愛する者として何よりうれしい。

(この項 終)



昭和30年代の備忘録
僕と日本の少年時代
for iPhone

あの日、未来は明るかった――。
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいきいきと見えます。

ゲーシー先生や力道山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぴいの少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の銘柄の馬肉100%コンビーフや怪しい避けられないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。



付録ムービー
テレビ・芸能
1. テレビの青春時代
2. 教科書だったアメリカのドラマ
3. フロックスと力道山
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」
5. コマンズの女王 楠トシエ
家電
6. 電気釜の裏うつ
7. カラーテレビ狂騒曲
8. 100%コンビーフが欲しい!!
9. クーラーをつけたまま寝ると死ぬ?
10. ホラロイドカメラ
11. 可愛いワゴンカメラ
12. 8ミリフィルム



食
13. モナカカレーと「少年ジエツ」
14. アメリカンドッグ開始+レモネード
15. ハンバーガー高潮
16. スイッチは何かある物?
17. 謎のトルメン
18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ
19. 裕太ジュース感懐き
20. 傑作! 噴水型ジュース自販機
21. 10円アイスクリームが花盛り
22. 海苔たがみつければ
ホビー
23. 鉄の手裏剣
24. 2B弾とクラッカー
25. 姫玉鉄砲の王道



26. 輝くマテル
27. 黒かった金銀製のモテルガン
28. プラモデル熱中時代
社会・文化
29. アメデの時代
30. 外事変遷記
31. 国産車は酷使せ?
32. ワンドイツのような車の三角窓
33. アパートはワンダラランド!
34. 町の映画館
35. 折のたまたまコップ
36. 月刊マンガ誌と付録
37. ベラベラのソノシート

* 当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて *
本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒 2012 年 9 月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980 円 (税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。